



## 初めての海外赴任で知ったラオスの生活

国立国際医療研究センター 国際医療協力局

運営企画部 保健医療開発課 天野 優希

「サバイディー キンカオレオボー  
[ສະບາຍດີ ກິນເຂົ້າເລັດວິບ? (おはよう！朝ご飯は食べた?)]」

ラオスの朝はこの言葉から始まる。日本にいた際は、出勤時に挨拶とセットで朝食を食べたか聞く習慣が無かった。赴任当初は不思議な感覚だったが、私が最初に覚えたラオ語という事もあり、現在ではコミュニケーションの1つとして多用している。

今回どのような経緯でラオスに来たのか、少し説明しようと思う。私は中学時代に国境なき医師団やUNICEFのビデオを見て、各国の格差に驚いた記憶がある。同年代の子たちが苦しんでいる姿を見て、生命の重さは同じにも関わらず何故国が違うだけで格差があるのか、国による格差を医療で無くせたらと思い、看護師を目指し始めた。私は国境なき医師団や国際緊急援助隊の様に紛争地域や災害現場に入り1人1人に対応する「緊急援助」から国際協力に興味を持ち始めた。大学卒業後、国際色の強い国立国際医療研究センター病院に就職し、緊急援助だけでなく、低中所得国の制度整備や仕組みづくりを支援する「開発援助」という国際協力を知った。国際協力の各ステージの役割を知り、色々な国際支援方法に興味を持ち、現在は「開発援助」の国際協力に関わっている。

私が携わっているプロジェクトは、「ラオスの看護師・助産師さんたちが看護師免許を更新できるシステムを整える」というものだ。日本は、看護師等国家試験に合格し免許を取得すれば生涯看護師等として働くことが出来る。一方ラオスでは、「5年毎に看護師免許を更新しよう」という流れがある。看護学校卒業後も、継続して医療を学んでもらう事を

目的に、免許更新の仕組みを作り上げている最中である。ざっくりいうと、日本の運転免許証更新と似ている。運転免許を更新する際は、①免許更新の通知が届く、②手続き期間内に必要書類を持って、運転免許試験場等に行く、③必要な講習を受講する、等のプロセスがある。このような仕組み作りを行うには、どのようなプロセスが必要か多方面から協議し、看護師の免許更新に関する仕組み作りを支援している。とはいえ、実際はラオスに来て2か月経過したところだ。今回はその間に感じたラオスの日常生活を綴っていく。

元々海外旅行は好きな方であったが、1か月以上日本を離れたことが無かった。赴任して3週間程度は、アパートが見つかるまでホテル暮らしだった。旅行にハプニングはつきものとは聞いていたが、私にとっての最初のハプニングはホテルの部屋で起こった。まだ生活に慣れていない頃、気付いたら電気を付けっぱなしで寝ている事が多く、夜中に目覚める事が多々あった。その際に、カタカタキリキリという様な音を聞いていたのだが、エアコンの調子が悪いのかと思い、あまり気にしたことが無かった。そんな生活が続いていたある日、夜中に目覚めると目の前に生物がいて、驚愕した出来事がある。その正体はヤモリである。毎日夜に聞いていた音は、彼らの鳴き声である事によりようやく気付いた。ヤモリに遭遇したことが無かった私は、急いで彼らの生態について検索すると、「夜行性であり、人間に害はない。普段は大人しいが縄張り争いやストレスを感じた際に鳴く」との記載があった。私はいつの間にかヤモリと共存しており、かつ電気を付けっぱ

なしで寝ていたためストレスを与えてしまったのではないかと、申し訳ない気持ちになったのを、ヤモリを見るたびに思い出す。今では自らヤモリを探してしまう自分がおり、トッケイヤモリと出会う事が目標の1つである。

もちろんハプニングだけでなく、ラオスの人々の心の温かさや寛大さに日々感動している。ホテルのスタッフの方々はいつも笑顔で迎えてくれるため、朝食の時等、毎日何かしら覚えてたのラオ語で話しかけ、一方的にコミュニケーションを取り続けた結果、「あなたはもうFamilyだよ」と言ってくれ、賄い料理までも振舞ってくれた。図々しくもご一緒させてもらい、かつラオス語や韓国語も教えてもらうという、とても楽しい経験をさせてもらった。

私が携わっているプロジェクトメンバーは、日本人スタッフ3名、ラオス人スタッフ3名、運転手さん1名、清掃員さん1名で構成されている。一緒に働いているラオスの方々も寛大な方が多い。私たちは良くラオスの保健省や病院看護部の方々と一緒に仕事をする機会が多いのだが、時折企画していた会議や研修が延期になることがある。そのような時は、皆「<sup>ポーペンニャン</sup>ໂຮງ (大丈夫だよ／何とかなるよ)」と口ずさみ、何事も無かったかのように仕切り直しとなる。会議や研修を行うための色々な準備や話し合いに多くの方々の時間を割いていただいていたため、延期になることで落ち込むこともあった。そんな私を見てラオス人スタッフも良く「ポーペンニャン」と言って励ましてくれ、同時に、「ヤボーン」

という瓶に入った練り香水の様なものを嗅がせてくれる。若いラオス人スタッフは、「ヤボーン」を携帯している。これは2つの用途があり、1つは香りで心を落ち着かせる効果、もう1つは虫刺され等ちょっとした傷がある時に塗布するようだ。スタッフらは1日に数回香りを嗅いでいる。勤務時間内に嗅ぐ回数が多いと、ヤモリに引き続きこちらにもストレスを与えていないか心配にはなるものの、リラックスした表情になるため大丈夫だと信じている。それを私にも共有してくれる。因みにこれは職場に置いてある「救急セット」の中にも入っている。疲労時や腹痛時に効果があると説明があり、機会があれば試してみようと思っている。まだ自分のヤボーンは手に入れていないが、ちょっとした心の抛り所が、すぐ手の届く範囲にある事は良いと感じたし、いつも寛大な心を持ち続けられる1つの要因なのかとも感じた。

そんな日々を過ごしていると、自分も心に余裕を持ち、常に「ポーペンニャン」のマインドでいたいと思う自分が出てきた。それと同時に、不測の事態にも対応できるよう、プランA、B、Cと先々の事をパッと考えられる癖をつける良い機会かもしれないとも思い始めるようになった。初めての海外赴任、学生の頃からずっと思い続けてきたので楽しみではあるものの、不安な思いもあった。しかし、これから1年間は多少の緊張感を持ちつつ、「ポーペンニャン」の心でラオスの生活にどっぷり浸っていきたいと思う。